

ヒドロキシクロロキンが著効したDLEの1例

平川 結賀¹⁾、奥野 愛香¹⁾、木村 大作²⁾、大桑 隆³⁾、古川 福実¹⁾

¹⁾：高槻赤十字病院皮膚科、²⁾：高槻赤十字病院眼科、³⁾：大桑皮フ科

31歳、男性。約5年前に鼻背部に自覚症状の乏しい紅斑が出現。近医でクロベタゾールプロピオノ酸エステル外用とタクロリムス外用にて加療していたが改善が乏しく当科紹介。初診時、鼻背部に径35×20mm、中央萎縮性の紅色局面と両側頬部に10mmの表面に鱗屑伴う紅斑が存在していた。病理組織学的には、毛孔角栓を伴った角層の増生、一部の表皮真皮境界部に空胞変性がみられた。付属器および真皮上層から下層の血管周囲では密なリンパ球浸潤が認められた。病変部の蛍光抗体直接法では明らかな陽性所見を認めなかった。血液検査ではWBC:4000(μl)、RBC:509(10⁴ μl)、Plt:19.7(10⁴ μl)、LDH:146(IU/L)、BUN:26.6(mg/dl)、Cre:0.86(mg/dl)、GOT:15(IU/L)、GPT:13(IU/L)、抗核抗体：<40(倍)、抗SS-DNA IgG抗体：343(AU/ml)と高値であった。以上の所見より本症例を円板状エリテマトーデス(CLASI score:11)と診断した。身長168cm、体重59kgでヒドロキシクロロキン300mg内服を開始した。内服2週後には頬部の皮疹が縮小し、CLASI score:8点に改善を認めた。経過で軽度下痢症状を認め、プラケニル200mgに減量し継続した。本邦での本疾患のヒドロキシクロロキン投与例は蓄積中であり、文献的考察を加えて報告する。